

日本農学図書館協議会誌 187号 (2017年9月)

目 次

小山市立中央図書館の農業支援サービス 木村香保里	1
明治大学和泉図書館 (2012年5月開館) 建設計画における協働体制 折戸晶子	6
【海外図書館の最新動向 第10回】 米国図書館に見る図書館の「進化」 櫻井真理子	11
＜図書館紹介＞ 東北大学附属図書館農学分館	17
＜図書館員のためのお役立ち情報＞	21
事務局報告	25
・平成 29 年度第 2 回理事会議事録 ・特定非営利活動法人日本農学図書館協議会第 14 回通常総会 ・主な取組み	

Bulletin of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

No.187

September,2017

ISSN 1342-1905

CONTENTS

Outreach to Farmers to Support Local Agricultural Industry Kaori KIMURA	1
The collaboration system in construction plan of Meiji University Izumi Library. Akiko ORITO	6
【A Series on the Current Trend of Overseas Libraries : The10th Part of the series】 The evolution of library seen from the American libraries Mariko SAKURAI	11
< Introduction of the University Library > Tohoku University Agricultural Library	17
< Useful Information for librarians >	21
Note from JAALD	25

小山市立中央図書館の農業支援サービス

OYAMA: Outreach to Farmers to Support Local Agricultural Industry

木村 香保里*

はじめに

小山市立中央図書館の農業支援サービス事業は、取り組み開始から今年で10周年を迎える。「図書館は小山の農業を応援します！」をキャッチフレーズにこれまで進めてきた図書館ならではの支援事業を振り返り、今後の展望を見据えていきたい。

1. 小山市発祥の農業支援サービス

1) 始まりはビジネス支援サービス

小山市では、職員の自己啓発を図ることを目的に平成9年度より職員がグループで自主的に研究活動し、市の政策課題等をテーマとした政策提言をする自主研究を推進している。

平成16年、小山市役所職員8人による自主研究グループ「ビジネスサポーターズおやま」が「図書館・公民館との連携による『ビジネス支援体制』の構築について」をテーマに調査研究に取り組んだ。先進ビジネス支援図書館の視察や市役所内外の現状調査・分析等を経て課題を抽出し、研究を進めた結果、6つの事業を提案した。市の助役（現在は副市長）を委員長として構成される自主研究支援委員会による審議の結果、4事業が「市の施策として有効と認める」とされ、さらにそのうちの3事業が平成17年度当初予算において予算化された。ビジネス支援バックアップ事業の始まりである。

小山市は、国道4号および50号、JR東日本の東北新幹線、宇都宮線、水戸線、両毛線が縦横に交わる交通の要衝であり、首都圏に近いという恵まれた立地条件を背景に工業都市として発展を遂

げてきた。ビジネス支援サービスはこれからの「市民に役立つ図書館サービス」を考える上でも重要な役割を担うと期待された。

なお、認められたのは、以下の4事業である。

- ①ビジネス支援コーナーの設置
- ②ビジネス支援図書館の創設
- ③元気アップビジネスセミナーの開催
- ④おやまビジネス支援連絡会の構築

おやまビジネス支援連絡会は、小山農業協同組合、小山商工会議所、間々田商工会、桑絹商工会、小山市美田商工会、白鷗大学、小山工業高等専門学校、関東職業能力開発大学校、小山市の関係する課に所属する担当で構成された。そして各職場の知恵・知見を提供し合い、交流することで情報を共有し、それぞれの事業展開の相乗効果に寄与する役割を担うものとして運営を開始した。



写真1 ビジネス支援コーナー

*小山市立中央図書館 〒323-0807 栃木県小山市城東1丁目19-40

Kaori KIMURA, Oyama City Central Library 1-19-40 Oyama city Joto, Tochigi 323-0807, JAPAN

2) 農業分野で起業するセミナー受講生

小山市立中央公民館との共催で、創業・起業する人向けに開催した初めての「元気アップビジネスセミナー」は全10回、各回3時間のカリキュラムで定員15人。カリキュラムは小山商工会議所で既に実施している「創業塾」等との棲み分けをし、創業に迷いのある人、何かを始めたい人などを対象にしたきっかけづくりになる内容とした。



写真2 元気アップビジネスセミナー開講

このセミナーには定員を超える19人の申込みがあり、その反響に喜ぶとともに、閉講後には受講生から起業家が誕生するという大きな成果を得ることができた。起業の分野はさまざまだが、中でも農業分野での起業家が複数生まれたことにより、私たちは小山市の地域特性をあらためて認識することになった。即ち、小山市は「水と緑と大地」の豊かな自然に恵まれたまちであるということだ。

セミナー受講後に農業分野で起業したのは、道の駅思川でジェラート店を開店した酪農家の妻、都内の会社を定年退職後に小山で農業を始めた元会社員、息子とともに野菜の直売所を始めた主婦など。それぞれセミナーを受講する前は、自分が本当に起業できるか迷いや悩みがあったようだ。しかし、無料で誰でも利用できる図書館でこうしたセミナーを開催し、資料を揃え、関係機関との連携によって専門家への橋渡しをしたことが、彼らの迷いや悩みを解決する糸口となった。「開催案内を見て、私のためのセミナーだ！と思い、すぐに受講を申し込んだ」と当時を振り返る受講生の言葉は、とても印象深い。

図書館の資料と機能を市民にもっと利用し役立ててもらうために、「農業」は当館の重要なキーワ

ードとなった。

3) 農業支援サービスの始まり

平成19年、文部科学省の「地域の図書館サービス充実支援事業」に応募、採択され、約108万円の補助金を受けて、農業支援サービス事業を開始した。

折しも小山市では、この年から「団塊・シニア地域活動推進事業」を進め、農業講座の実施や農業体験農園等の開設などのグリーンツーリズムの推進や就農支援に力を入れるなど、「農業」が地域の大きな課題とされた。

図書館には、農業に関する資料も豊富に揃っている。図書館の資料と機能を使い、関係機関と連携し、地域に根ざした図書館サービスの充実と農業の活性化および地域振興・発展に貢献することを趣旨としたこの事業は、市の政策方針にもしっかりと合致した。だからこそ、文部科学省の委託期間が満了した次年度以降も市の重点事業として継続することとなり、10年が経過したというわけだ。

農業支援サービスは、小山市独自のビジネス支援のスタイルとして市内外から注目され、多くの新聞や雑誌等に紹介記事が掲載された。当時、実施した事業は、以下のとおりである。

① 生産者への情報提供

- ・農家向けの図書館案内パンフレット作成
- ・農業支援コーナーの設置・充実
- ・農業なんでも相談室の実施
- ・「農家・消費者のためのインターネット講習会」開催

② 消費者への情報提供

- ・「おやま地産地消ライブラリー」の作成
- ・おやまブランド特産品コーナーの設置
- ・関係機関との連携による農業支援のPR（小山市農業祭への出展）
- ・「消費者のための食の安全講座」の実施
- ・「地産地消のお店」メニューの収集
- ・「としょかん朝市」の開催

③ 農業ビジネスの情報提供

- ・農業ビジネスの資料提供、関連図書リストの作成・配布および専門窓口紹介
- ・農業ビジネス講座の実施

④ おやまブランドの全国発信

- ・支援事業の広報紙および公式ホームページ

での広報・報告

- ・ケーブルテレビとの連携およびマスコミへの情報提供
- ・市内小・中学校での総合学習教材としての利用促進
- ・「おやま地産地消ライブラリー」の充実



写真3 「としょかん朝市」での野菜販売による事業PR（図書館正面入口前）

2. ALA ポスターセッションでの情報発信

今年6月にイリノイ州シカゴ市で開催された米国図書館協会（ALA）年次総会でのポスターセッション2017において、当館の農業支援サービスの取り組みが紹介された。ビジネス支援図書館推進協議会（BL 協議会）が日本の事例として当館を含め3件を応募し、全てALAに認められ、紹介されたものである。

ビジネス支援図書館推進協議会は、平成14年12月に、創業支援経験者と図書館関係者が協力して設立された。創業とビジネスを支援するビジネス支援図書館の創出を通して図書館の発展に貢献し、中小企業へのビジネス支援や市民の起業・創業を呼び起こすことにより、地域経済そして日本経済発展に寄与することを目的としている。今年が初めての参加というALAポスターセッションに、小山の取り組みを選んでいただいたのは大変光栄なことであった。

ポスターは、サイズが縦120cm×横240cm、内容は、記録写真やイラストを多用して、農業支援サービスの始まりから現在までの活動の様子が順を追って見られる構成とし、今後も継続していくサービスとして結んだ。また、展示品としてキャ

ッチフレーズ「図書館は小山の農業を応援します！」を印刷したのぼり旗や、ポスターに掲載しきれなかった記録写真をまとめたフォトブックを用意し、配布用として小山の農業に関するパンフレット・チラシ10種類を各20～30部用意した。配布用はもちろん英語表記があるものを中心とした。



写真4 ALA ポスターセッションの様子

現地会場では、世界各国の図書館活動の事例150件が、ポスターにして紹介された。プレゼンターとして当館の取り組みの紹介を担ってくださった田村俊作氏（BL協議会理事、慶応義塾大学名誉教授）によれば、持ち時間90分の間に訪れた来場者からは、「ポスターの構成がわかりやすい」「としょかん朝市、農業祭への出展、かんぴょうスピーカーの展示など、発想がユニーク」「公共図書館が農業を支援する、それこそ私たちもやりたいこと」など、高評価をいただいたとのことだ。

3. 今年度の事業概要

農業支援サービスの各種事業は、この10年の間に多少方法や形を変えたものもある。アンケートや利用状況などから利用者の要望・動向に合わせて変化してきた。現在実施しているものは以下のとおりである。

1) 農業支援コーナーの運営

小さなコーナーではあるが、大まかに4つのテーマで図書資料を集めている。

- ①始めてみよう農業
- ②農作物の育て方
- ③食の安全について考える
- ④農業ビジネス

日本十進分類法 (NDC) では別の書架に配架されてしまう図書でも、これらのテーマに合うものが一か所に並ぶ。随時入れ替える。



写真5 農業支援コーナー (左は、ブックリストと図書の展示)

2) ブックリストの作成

ビジネス支援と合わせて、年に6回ほど。館内掲示、配布、ホームページに公開。

3) 家庭菜園のコツ！相談事業の実施

①DVD 上映会&公開相談室 (5月実施済)

②個別相談室 (6月実施済)

いずれも事前に質問・相談を受付し、当日に相談員が回答する。相談員は栃木県農業振興事務所より派遣を依頼した。回答の際は、オンラインデータベース「ルーラル電子図書館」(農文協)も活用する。

主な相談内容は、野菜の栽培について、肥料・土・農薬について、病虫害の防除対策についてなど。公開相談室では、それぞれ異なる野菜について相談されるが、専門家である相談員からの回答に加え、参加者どうしの情報交換等もでき、好評を得ている。個別相談室では、ひとり30分の時間内でじっくりと相談できるため、終了後のアンケートでも「勉強になった」「他の人にも役立ちそう」など、満足度が高い。

4) ホームページ「地産地消ライブラリー」の充実

小山市の農業関連情報を掲載する他、大手レシピサイト「クックパッド」に公開中の「小山市公式キッチン」にもリンクしている。

5) 小山市農業祭への出展 (11月予定)

中央図書館の事業紹介や食育をテーマにした絵本の読み聞かせを行う。

会場は、小山総合公園の第3駐車場。特設のステージでは優良農家や優良農業団体の表彰、新規就農者の紹介などが行われ、その前にずらりと並ぶテントでは農畜産物の展示販売、おやまブランド品の販売、6次産業化新商品の試食・販売が行われる。

中央図書館は、市の農業関係各課や関連団体等の展示・PRと並んで出展している。来場者からは「なぜここに図書館が？」の声が聞こえることもあるが、食育をテーマとした絵本を見れば「図書館に行ってみよう」と思い、またテント内に掲示した事業報告等を見れば「図書館はこんなこともするのか」と認識を新たにする。

潜在的な利用者を掘り起こし、図書館を活用してもらうために、農業祭でのPRは効果的である。



写真6 小山市農業祭での読み聞かせ

6) 農業支援サービス10周年記念事業 (11月頃実施予定)

今年度は、農業支援サービス事業が10周年を迎える。10年間の活動や成果を振り返り、新たな10年への指針作りをする予定である。

①としょかん朝市

・小山市産の野菜販売、おやまブランド品の展示等

②記念シンポジウム

・基調講演
・ALAポスターセッション参加報告
・新規就農者事例発表

③農業支援サービス事業活動報告展示



図1 10周年PR用掲示物

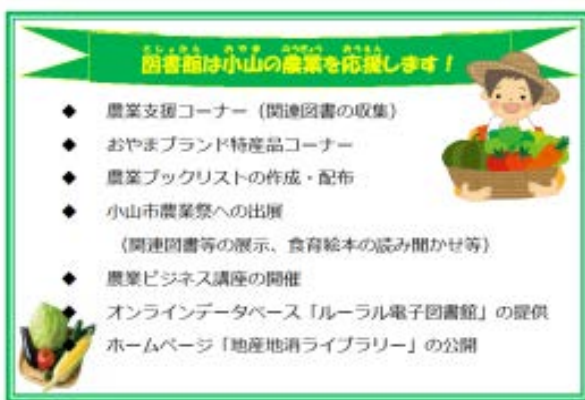


図2 事業PR用掲示物

4. 今後の展望

そもそも、図書館におけるレファレンス（調査相談）サービスは、利用者から寄せられる趣味や日常生活上の疑問、学問や仕事上の調査研究における質問や相談などについて、図書館の資料や機能を活用して利用者を援助することである。必要に応じて、県内外の図書館や専門機関などを紹介するレフェラルサービスも行う。

どんな相談でもまずは聞き取り、調べて回答する、という職業的習慣が司書にはしみついている。図書館が当然のこととして日常的に行っていたレファレンスサービスではあるが、何を尋ねられてもある程度調べられる資料を収集し、整理しておく、それはどちらかと言えば受け身の姿勢であったかもしれない。

公立図書館は、「図書館法」に基づき、地域住民に図書館サービスを無料で提供する。そのサービスは地域のニーズに合わせて展開していかなけれ

ばならない。ビジネスセミナー受講生の起業をきっかけに、小山市の地域特性を見据えて始まった農業支援サービス事業は、「おやまビジネス支援連絡会」や関係機関との連携により、地域の課題を抽出、共有し、図書館を使った解決のための情報提供に取り組んできた。受け身ではなく積極的に館外に出て、人や機関とつながることが、図書館サービスを大きく変えた。そして利用者から一定の評価を得て、今年が10周年の節目である。

今後は、誰もが気軽に無料で利用できる図書館施設と資料、課題解決のための情報探索を支援する司書の存在を、地域創生・活性化に役立てていくために、今までに培ってきた顔の見える連携を大切にしながら、司書の専門性を更に向上させていくことが課題である。

当館全体の「豊かな人と地域を創る図書館」と農業支援「図書館は小山の農業を応援します！」のキャッチフレーズを再確認し、引き続き事業に取り組んでいきたい。

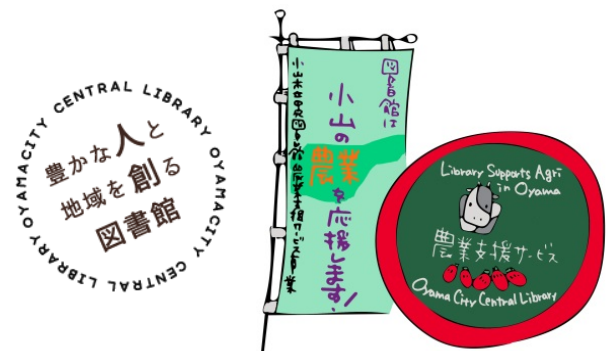


図3 キャッチフレーズ画像

明治大学和泉図書館（2012 年 5 月開館）建設計画における 協働体制

The collaboration system in construction plan of Meiji University Izumi Library.

折戸晶子*

1. はじめに

明治大学和泉図書館の紹介を本誌 No. 185（2017 年 3 月）に掲載していただいた。文中において、和泉図書館建設計画について、その体制や関わった方との関係性については別の機会に譲りたい、と記したことから、本紙編集委員会から改めてその機会を頂戴することとなった。こんなに早くその機会が巡ってくるとは思ってもいなかったため、執筆にあたり準備が不十分なところもあったかもしれない。その点ご容赦いただくとともに、このような機会をいただけたことに感謝申し上げたい。

2012 年 5 月に開館した和泉図書館では、これまで 400 件以上の事前申込による見学案内を行ってきた。その見学目的、見学者は様々である。見学目的は、新図書館建設や一部改修の参考としての施設見学のほか、建設計画はないが新しい図書館事例や運用サービスを学ぶための研修の意味合いとして見学される場合などである。見学者としては、図書館関係者、設計者、図書館が所属する組織の施設管理者のほか、組織の代表者などである。図書館関係者は、図書館職員、研究者、図書館関係業者などで、大学のみならず、国内各種図書館のほか、海外からも来館されている。このほか、案内不要の自由見学者も多数である。

和泉図書館は、これら多くの見学者の方々からも賞賛の言葉を頂戴してきたが、図書館界、建設業界からも高く評価を受け、様々な賞を受賞した。2016 年度に、これら受賞の表彰状及び盾を、建設

計画に関わった関係者への感謝の意を込めて、和泉図書館入りロゲート横のインフォメーションカウンター上部の壁にディスプレイした。

2. 検討体制

私が見学案内をする際に必ず話すことは、和泉図書館建設計画における体制とプロセスである。その特徴は、大学の施設管理部署（施設課及び調達課）と設計者と図書館職員が全行程において連携体制を取り、協働してきたことである。建物はそこで展開される活動に基づいて設計されるため、運営者である図書館と建物をつくる設計者との連携は非常に重要である。図書館職員は、建設計画の検討過程で、旧図書館での活動に加え、新たな活動イメージや機能を十分検討し、それを設計者に示していく。その具体的なイメージや与条件から設計案が提示されると、図書館職員は、その提案で図書館の機能が果たせるかを考え、判断し、設計者に返す。この繰り返しによってより良い設計案が提案されてくる。和泉図書館の建設計画では、「より良い図書館をつくろう」という一人ひとりの意識が共通の目標となり、もっといい案はないか、と徐々に熱が入り、それぞれの立場で皆が追求し続けるようになっていったのである。そして、同じ目的に向かって皆で一緒に取組むことで、大きな力となり、それが成果につながり、結果としてこのように多くの評価を受けることになったのではないかと考えている。

* 明治大学和泉図書館事務長 〒168-8555 東京都杉並区永福 1-9-1
Akiko ORITO Manager Izumi Library Office, Meiji University Library, 1-9-1, Eifuku Suginami-ku,
Tokyo, 168-8555, JAPAN

現在は他大学・他機関でも同じような事例も増えてきたようであるが、当時は、図書館職員が施設部門や設計者と関わるのは基本設計くらいまでで、その後の計画最終段階まで同じ会議体に出席することはほとんど事例はないと聞いていた。和泉図書館の場合、図書館職員は、竣工日まではもちろんのこと、開館後のアフター定例の会議にも出席し、関係者とともに歩んできた。このような体制で取り組んできたことで、利用者の使い勝手、建物としての評価、運営面での機能がバランスよく融合された図書館が完成したのではないかと感じている。

この計画において、図書館職員は、設計者側との協働体制と図書館全体での検討体制の両方で活躍した。図書館内に 6 つの WG を設置し、全キャンパスの図書館職員がいずれかの WG メンバーとなりこの計画に関わった。そして、図書館の責任者や WG 座長が設計定例や分科会などの会議体に出席し、図書館と設計者及び大学施設管理部署との連携に努めた。

3. 価値観の共有

このような体制で図書館職員が終始関わりを持てたのは、施設課職員の考え方が大きく影響している。その考え方の根底にあったのは、「みんなで価値観を共有し、ものづくりをする」、というものであった。そのために最初に行ったことは、他大学・他機関の図書館見学であった。

図書館職員が見学先を選定し、施設課職員とともに見学のポイントを打合せ、報告書の書式を作成した。見学当日は、それぞれの立場や視点から見学先の方に質問させていただき、見学後は報告書を作成し、内容を共有した。時には見学後に時間を取って、お茶を飲みながら語り合ったりもした。そうするうちに、図書館職員、施設課職員、設計者それぞれの視点を互いに理解できるようになっていった。そして、報告書には、一般的に良い点・悪い点、和泉図書館に取り入れたい点・取り入れない点をまとめた。三者での見学は、設計初期の 2009 年の夏に集中的に実施し、20 か所を見学した。その後、2011 年までの間、それぞれが見学した総数は 80 か所にも及んだ。

この見学を行ったことで、“どこどこの何々のような”，という表現だけで同じイメージを持つこと

ができ、議論も効率よく行われていった。

4. 会議

検討プロセスにおける会議体の概要を図に示した。開催状況の一部を紹介しよう。和泉キャンパス新図書館建設委員会（以下、「建設委員会」）は、2008 年～2011 年の間で 16 回開催した。設計定例は、2009 年 6 月 17 日を初回とし 2010 年 6 月 23 日までに 48 回開催した。この図にはないが、工事が始まってからは現場定例が開催され、2010 年 9 月 22 日から 2012 年 2 月 29 日までに 70 回開催している。このほか、設計定例のもとに各分科会が設置され、それぞれ 20～30 回開催されている。

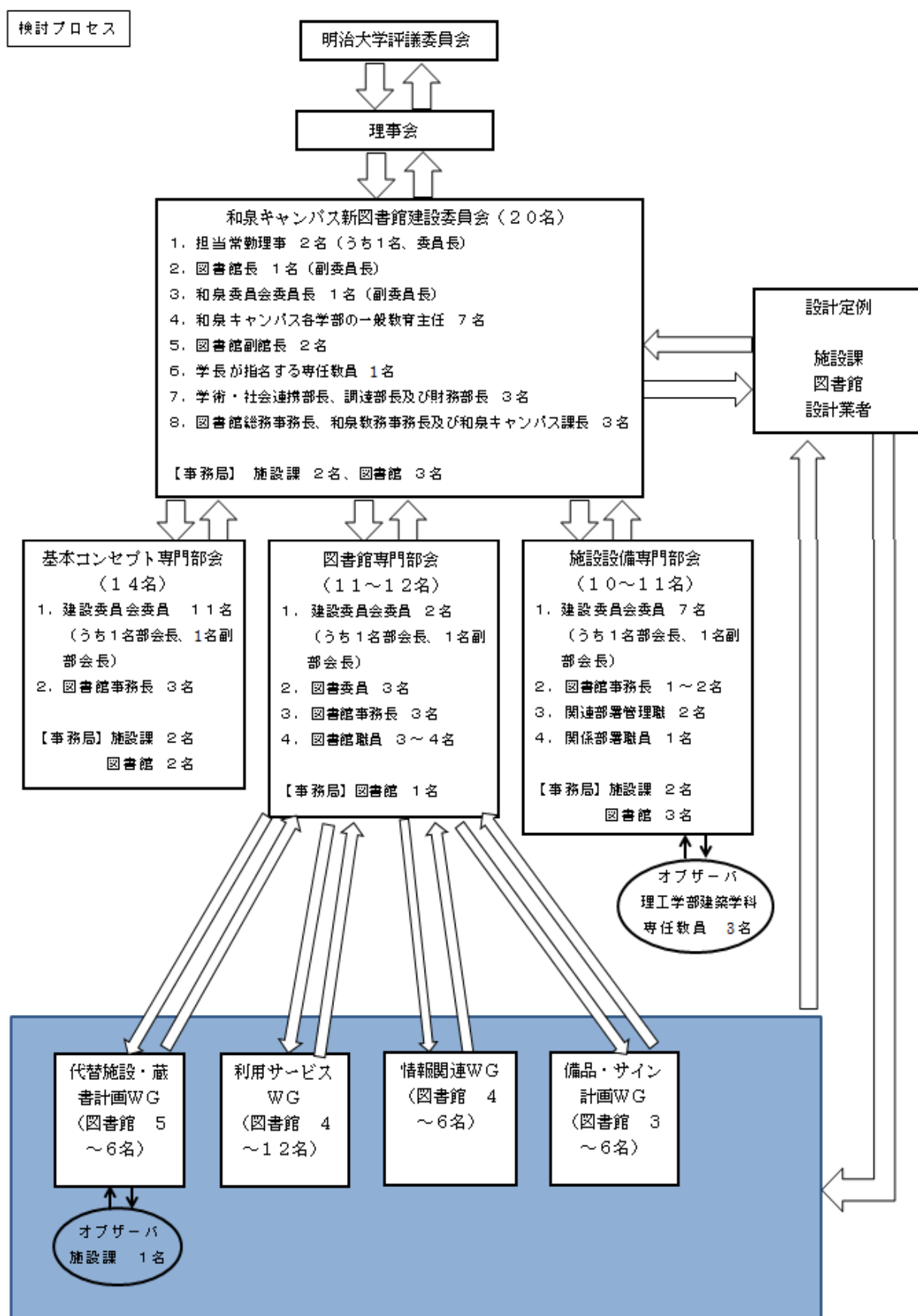
図書館内の WG は、設計定例、分科会と連動する形で活動してきたため、日常業務の傍ら、ほぼ毎週にわたって WG が集まっていた。

私は、全体を通して少しずつ関わりを持たせていただき、図書館側の意向を施設課や設計者に理解してもらえるように説明し、また、その逆に設計提案を図書館職員に正しく伝わるように努めた。

5. 設計図を読む

設計定例では、建設委員会で作成した基本コンセプトと図書館側が作成した与条件表に基づき、毎回図面で提案が出される。最初は、フロア配置の検討のためのざっくりとした図面であるが、検討が進むにつれ総合図が作成されてきた。このような総合図は、図書館職員が読めるものではないが、それでも確認するようにと施設課職員から言われた。それは、皆が責任を持って取り組むという姿勢の一つの表れであったと思う。代表的な図面上の記号の説明を受け、わからないなりに図面上を仮想歩きしてみる。図面歩きは、必要に応じて WG メンバーにもお願いした。素人の強みで、わからないこと、疑問に感じたことは恥とせず、小さなことでも設計者に尋ねた。これに対して設計者はどんな些細な質問に対しても誠実に答えてくれた。図書館側が重点的にチェックしたことは、利用動線と管理動線において不都合がないか、備品や設備面での配置に不都合がないかなどである。

また、書架・家具備品定例会議では、書架や閲覧席などの備品の検討をし、それらの施工図のチェックも行った。この施工図も図書館職員にはなかなか読み解けないものであったが、調達課の職



員とともに時間を惜しまずに丁寧にチェックした。特に利用面で気になる高さやサイズ感、利用者の体に当たる見付け部分や曲線の具合などを細かく確認した。管理面でも、例えば雑誌書架の面置きの新着雑誌棚の角度やタイトル表示箇所のサイズなどに注視した。

6. モックアップで確認

この計画において、モックアップの製作が沢山行われたことを報告したい。閲覧席、椅子、書架などの備品やサインだけでなく、天井などの内装、さらにはルーバーやガラスなどの外壁までのモックアップを各施工業者が製作してくださった。

閲覧席は、6 種類の形それぞれに荷物棚の高さ 3 種類、奥行き 2 種類、見付け部分の形状 2 種類、パーテーション 3 種類が製作された。これらを学内に一ヶ月ほど展示をし、図書館・施設課・調達課の職員に実際に座ってもらい、アンケートを行った。閲覧椅子、ラウンジチェアなどもしばらく展示し、座った感触や高さなどを確認し、より良い形になるよう設計者とも相談し、修正していただいたこともあった。これとは別に、閲覧席のタスク照明について、照度や照射範囲、照明器具の位置なども確認した。

書架については、基礎部分の施工方法、本体部分の棚板や塗装、側板のデザインと書架サイン、さらにリーディングライトの照明器具デザインと色合いなどをモックアップなどによって確認した。図書館職員が特にこだわったのは書架サインである。書架移動の度に書架サインを変更しなければならないため、書架サインの変更作業がしやすく、見栄えも良いものにすることを重視し、細かい部分まで修正していただいた。さらに、書架耐震実験が行われ、施工業者によって書架・架台の構造検討がなされた。構造検討のような専門的な検討には、通常設計者と施設課職員で行われるのであるが、今回は、図書館職員も同席させていただいた。耐震実験は、国内・海外の過去の大地震の地震波 7 種類について行われた。書架に図書館の配架状況と同じように本を並べ、それぞれの地震波で揺らし、架台の強度、架台と書架の接合部の変位、書架全体に歪みや亀裂が生じていないかなどを確認した。この実験を踏まえ、耐震性能をより高めた施工をしていただいている。

ルーバーを配した外壁については、窓際席に座った時に目線にルーバーが入ってこないように設計されており、なるほどこうなるのか、と体感できた。設計者はルーバーの角度を入念にチェックしていた。この時、天井の素材、デザインも確認している。

壁面ガラスも数種類用意されており、微妙に異なる色味についてどれが良いか皆で話し合った。また、施工方法についても幾通りかあり、設計者と施設課職員でどの方法で行うか打ち合わせていた。

フローリングについては、音の問題から慎重に検討されていた。そこで、実際に施工されている施設に行き、足音の響き方を確認し、納得した上で施工していただいた。

和泉図書館では、立体的なサインを多く取り入れている。紙を二つ折りにしたような室名サインは、曲げたところの膨らみの具合を確認し、切り文字のような階数サインは、工事現場でサイズと設置位置を確認した。施工業者が最も力を入れたのは、日本十進分類法(NDC)区分表サインである。類ごとに 1 冊の本を模ったサインは、表紙・背表紙部分に金文字で分類番号を表記し、天・地・小口はまるで本物の紙のようになっている。それらの構造や本の大きさ、色、文字サイズなどを確認した。

7. 優先順位と取捨選択

これら総合図やモックアップを確認させていただきながら、一つ一つ形になっていくことを実感し、喜びを感じた。しかし、計画途中で予算が削減されたり、建設条件やその他の制限により、取り下げたものもいくつかあり、全てが当初の予定通りに進んだわけではない。そういった状況においても、皆がそれぞれの立場で最善を尽くし、代替案を提案したり、運用面でカバーする方法を考え、常に優先順位を念頭に置き、取捨選択を決断してきた。図書館職員も納得した上で選択してきたので、完成後に知らないうちに変更されていた、などということは一つもなかった。このようなことができたのも常に共に検討する体制が整っていたからであろう。

8. 図書館職員の関わり方

物理的な建物を作るのは、建設関係者であるが、その建物を使う者がそこに命を注ぎ込むことで、はじめてその建物が生かされるのだと私は考えている。図書館を運営する図書館職員がここで何をしたいのか、利用者にここでどんな活動をしてほしいと考えるのか、新しい図書館像をいかに思い描けるか、そういったことを自分自身に、そして皆にも問いながら計画を遂行してきた。

旧図書館での利用状況はそれほど多いものではなく、勉強や読書が好きな学生や必要に迫られて利用する学生がほとんどで、学生数の3～5割の利用にとどまっていた。新図書館計画では、既に利用している学生だけを対象にするのではなく、利用していない学生も日常的に利用したくなるような図書館となることを目指した。そこで、既に利用している学生の行動パターンのみならず、本学学生全体の性質を見極め、どんな学生でも利用しやすく、また、管理運営もしやすくすることを考え続けた。そうすることでより良いサービスが提供できると考えている。そのため、運営面での要望を設計者に伝え、施設課の調整のもとで計画を遂行してきた。

計画を遂行する我々自身が、学生たちであふれかえる様子、学生一人ひとりが笑顔で誇りを持って様々な活動を図書館で展開している姿を想像するようになり、楽しい気持ちになっていった。そんな気持ちを持っていると発想が柔軟で豊かになり、色々なアイデアが浮かんでくるものである。こういった発想も多くの事例を見学させていただいたためであろう。実際に見て、感じて、考え、そして皆で話し合う。それを繰り返していくうちに自然とアイデアが浮かび、それぞれがより良い図書館を作りたいという思いが募っていった。関係者全員の思いが詰まった和泉図書館は、今では学生数の5～7割以上の学生が利用している。

9. さいごに

建物づくりは一人ではできないものではない。多くの人たちと共に作り上げるものである。より良い建物はより良い人間関係から生まれる。自分自身の役割を全うし、相手を尊重する姿勢が大切である。そんなことを学んだプロジェクトであった。

図書館職員は、図書館のビジョンをしっかりと持

ち、要望を整理し、設計側に十分伝わるように説明できなければならない。設計者は、図書館職員の想いに共鳴し、それを形にしていく。その想いが強いほど、設計者の心にも強く響くのではないだろうか。また、このプロジェクトで施設課員が一級建築士の資格を持ち、設計の実務経験があったことも功を奏した。大学職員と建築士の両面から図書館と設計者の間に立ち、全体のバランスを考えながら丁寧に調整してくれたことは大変有難かった。そして、開館後の運用も大事であり、利用サービスのさらなる向上とともに建設当時の美観を損なわない心配りを継承している。

冒頭申し上げた見学者の中には、和泉図書館見学後に新図書館を開館されたところもあると聞いている。和泉図書館の事例が新たな図書館づくりに少しでも役に立ったのであれば幸いであるし、そうであると願いたい。

最後に、ここに述べてきた和泉図書館建設計画の連携体制で協働してきた方々はもちろんのこと、工事現場の作業員に至る全ての方々に対し、改めて心より感謝の意を表したい。

米国図書館に見る図書館の「進化」

The evolution of library seen from the American libraries

櫻井 真理子*

1. はじめに

明治大学図書館の職員として、私立大学図書館協会の助成を受け、2016 年 6 月に丸善雄松堂・図書館総合展主催の「ALA・米国図書館研修¹⁾」に参加した。参加目的は、米国図書館における独特な取り組みや先進的な事例を視察し、図書館の空間づくりのヒントを得るためであった。本研修会では、バックヤードツアーの他、現地スタッフとのミーティングが設定され、現地職員の声を聞く好機となった。

訪問した 2 都市 8 機関の中で、特に印象に残った図書館について、空間づくりや展示方法に着目し、紹介していく。

2. 訪問事例

Joseph Mark Lauinger Memorial Library (図 1)

ワシントンで最も印象に残った訪問先は、広大な敷地のジョージタウン大学(表 1)の図書館である。

キャンパス内には、本図書館以外にも法律や科学などの 10 分野に分かれている。蔵書数は、約 385 万冊の規模である。授業期間については、平日は 24 時間、週末は朝 8 時から翌 3 時まで開館している。

2 階にはラーニングコモンズの機能を果たしているグループスタディーエリアがあった。空間と

創立	1789 年
学校種別	私立総合大学 (15 学部)
キャンパス	メインキャンパスの他、 4 キャンパス
学生数	約 16,000 名
Web ページ	http://www.georgetown.edu/

表 1 ジョージタウン大学基本情報



図 1 図書館入口

しては、オープンスペースに椅子と机がある伝統的な図書館様式であった(図 2)。従来より、図書館での食事は禁じられてきたが、同フロアは、館内で唯一飲食可能なエリアとなっている。その一

*明治大学学術・社会連携部和泉図書館事務室 〒168-8555 東京都杉並区永福 1-9-1
Mariko SAKURAI, Izumi Library Office Academic and Community Relationships Division, Meiji University
1-9-1, Eifuku Suginami-ku, Tokyo, 168-8555, JAPAN

角に「MIDNIGHT MUG」という深夜2時まで営業しているカフェがあり、長時間在を目的とする利用者のニーズに応えたサービスが実現されていた。



図2 グループスタディーエリア

訪問時は、長期休暇期間につき、多くの学生は見られなかったものの、他のフロアと比べても利用が多いエリアとなっているようだ。また、特定のフロアのみを飲食可といった運用にした場合、他のフロアでの飲食マナーは守られているのか、現地スタッフに尋ねたところ、「食事はこのフロアのみと決めたことにより、ルールを破ってまで他のフロアで食事をする学生は、ほとんど見られなくなった。」というように、利用者の意識が変化している。また、各フロアの入り口に（図3）のようなサインが設置されていたことで、来館者全員に周知できるような仕組みになっていた。この事例より、注意喚起のサインを誰もが目にする場所にわかりやすい内容で設置することで、利用者マナーの向上につながるということが分かった。



図3 飲食マナー掲示



図4 Gelardin New Media Center



図5 センター入口サイネージ

2001年に開室した1階Gelardin New Media Center（図4）は、24時間開室となっており、様々なサービスを提供している。サービスカウンターには、専任図書館員と学生スタッフが配置されている。同センターでは、個人での購入が難しい、一眼レフ、3Dカメラからプロが使用するビデオカメラ等を取り揃え、デジタル・ネイティブ²⁾といわれている世代の興味関心を惹きつけている。入り口すぐのデジタルサイネージには、貸出機器とそれらで製作した映像が流れていた（図5）。

その他には、創造・編集の場として撮影スタジオ、音楽製作室、ビデオ編集室にバーチャルリアリティが体験できる設備が整っている。これらの備品や設備の導入により、かつて別々の場所でしかできなかった知識の吸収—ICTの活用—創造—編集—共有などの一連の学習プロセスが図書館内で出来るようになった。

また、同センターでは、スキルアップ支援として多彩なオンラインチュートリアルプログラムを

提供するlynda.com³⁾を利用者は無料でフルアクセスできる。

本図書館は、既成概念にとらわれることなく、食事を条件付きで可としたり、多くの利用者に図書館に来てもらうために最新の機器を取りそろえるなど、従来の図書館の役割から一歩先に進み、ワンストップ型の新しい学習の場として機能していた。

オーランド公共図書館 Orange Country Library System

オーランドの公共図書館（表2・図6）は、「図書館は本を読む場所」という常識を覆す、多機能な複合施設だった。正面入り口から入ると右手に返却カウンター、左手に貸出カウンター正面には、インフォメーションカウンターで構成され、誰が見てもわかる明快な構造になっていた。

入り口スペースにある数ある展示の中でも気に

設立	1923 年（1990 年増築）
構成	全 16 館の内、 メインライブラリーとして機能
蔵書数	170 万冊
入館者数	405 万 1000 人
職員数	約 350 名
館内施設	子ども図書館、友の会による書店、 メルローズセンター、講演ステージ

表2 オーランド公共図書館基本情報



図6 図書館入口

なったのは、図書館スタッフによるおすすめ本展示（図7）“LIFE AFTER GRADUATION”の特集である。学生ならだれしも興味関心を持つテーマである。卒業後の人生について考える機会を与えることによって始めて、必要なスキルを学ぶことに繋がるのだらうと本展示には関心させられた。筆者が務める大学図書館においても、特に入学して間もない学生をターゲットにして、真似てみたい展示テーマである。



図7 職員による展示

本館には、メルローズ財団からの寄付をもとに設立されたメディアセンター通称メルローズ・センター⁴⁾がある。グループで利用できるメルローズコモンズをはじめ、会議室、映像や音声などの編集スタジオ（図8）、ドライブシミュレーター（図9）、サウンドブース（図10）等多岐にわたる設備がある。これらは、メルローズ・センターの登録者であれば、予約を取って無料で使える設備となっている。最近では、3Dプリンター等の実習授業を実験室で行う近隣の学校もあるそうだ。また、図書館利用者以外の一般向けにも有料で場所を貸出している。2015年の実績として、センター内のスタジオ予約は年間2,100件あった。制作スタジオ等の利用は、年々増えていると話を伺った。見聞した所感ではあるが、利用者のニーズに応じて場所を備えることは、もともと要望をしていた利用者はもちろん、それまで関心が浅かった利用者に対しても、それらの施設を使用した創作意欲を掻き立てることにつながっているとのでないかと感じた。最新の機器備品の導入により、図書館が、新たな創造の拠点として機能している。



図8 レコーディングスタジオ



図11 司書とのマンツーマン相談室



図9 ドライブシミュレーター



図10 サウンドブース

図8－図11の引用：

<https://www.ocls.info/rooms-studios>
(2017-7-18)

サービス面では、図書館に足を運ばなくても、HPを通じて各種サービスを受けることが出来る

システムが充実していた。もっとも人気があるのは、資料のホームデリバリーである。独自のシステムを使い、アマゾンよりも早く配達することが可能となっている。その他、約77万冊のe-booksなどもオンライン閲覧サービスが使用できる。本館のパソコンエリアでは、レベル別で年間約2,000クラスのパソコン教室が開催されている。さらに生涯学習をテーマとしたイベントやクラスがひと月に1,000回以上開催されていて、その様子はウェブサイトでも配信されている。イベントのお知らせ広報については、図書館のHPのみならず多くのSNSのアカウントを駆使していた点が、印象的であった(図11)。

図書館の4階は、最も静かな学習スペースで、司書にマンツーマンで相談ができる“BOOK A PRO”専用の部屋(図12)があった。分野の専門の司書を予約して相談できるシステムをつくることで、レファレンスの質の向上を狙ったものだという。館内には、注意喚起のサインがあったが、複数の言語が併用されていたのが印



図12 SNSアカウントの広報

象に残った（図 13）。日本の大学図書館にも、海外からの留学生が多数、在籍している。特に守ってほしい基本ルールについては、多言語併記を取り入れるなどの配慮が必要になると感じた。



図 13 スマホ使用マナー掲示

その他の館内施設には、図書館限定グッズを販売するギフトショップや図書館友の会により運営されているブックストアがある。ここでの販売収益は、図書館のイベント費用に寄付されている。物理的な空間・設備という外面に加えて、充実したプログラムや人的支援などの内面でも「市民のニーズに応える図書館」として、新たな役割を担っていると感じた。

3. その他取り入れたいと思った事例

ナショナルギャラリーオブアート（National Gallery of Art Washington DC）

美術館を訪問した際に、写真投稿 SNS「インスタグラム」とコラボした企画が開催されているのを知った。この美術館では、来館者にお気に入りの絵を見つけてもらい、ハッシュタグ“#myngadc”をつけてインスタグラムに投稿することを推奨していた。共通のハッシュタグをつけることによって、同じ興味関心を持った人びとがつながり、交流が生まれる。また、美術館にまだ足を運んでいない人々にもどんな作品があるか拡散できる。口コミと SNS を使ってスマートフォン世代を引き込む新たな発信方法だと感じた。

議会図書館（Library of Congress）

トマス・ジェファソン館の展示企画の入口に質問が投影されたサイネージがいくつか設置されて

いた（図 14）。質問を投げかけられると答えが気になり、自然と関心が持てた。この事例により、人の目につきやすい位置に疑問を問いかけることで、見てみたくなる展示を演出できることが身をもって体験できた。

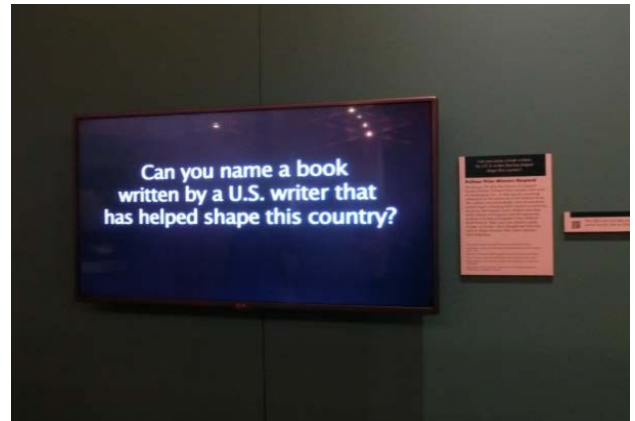


図 14 展示入口サイネージ



図 15 展示ディスプレイ

4. さいごに

米国の図書館を訪問し、大きく印象に残ったのは、既成概念にとらわれない自由な発想のもと、様々な企画や設備が提供されていたことである。

サービス提供側からみると、必要のないあるいは、やる必要のないことであっても、利用者からすると必要なことがある。「図書館とはこうあるべき」という固定観念から脱却し、利用者志向で様々なニーズに気づき、応えていく図書館こそが進化する図書館の姿なのかもしれない。

1. <https://www.libraryfair.jp/news/3449>
(2017-7-17)
2. **NHK**“デジタルネイティブ～次代を変える若
者たち～ (2008 年 11 月 10 日 NHK 総合テ
レビ)”
[http://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.
html?aid=20081110](http://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20081110) (2017-07-18)
3. <https://www.lynda.com/> (2017-7-18)
4. [https://www.ocls.info/locations-hours/melro
se-center](https://www.ocls.info/locations-hours/melrose-center) (2017-7-18)

東北大学附属図書館農学分館

Tohoku University Agricultural Library

1. 図書館概要

東北大学附属図書館は本館と 4 つの分館、14 の図書室で構成されており、農学分館はその分館の一つです。いずれも宮城県仙台市内にあり、市内 6 つのキャンパスにて各専門分野の図書館として活動しています。このたび紹介する農学分館は農学・生命科学等の資料を収集する農学系専門図書館で、蔵書数は約 14 万冊です。

東北大学は 2017 年に創立 110 周年を迎えましたが、農学分館の歴史は東北大学に農学部が設置された昭和 22 年（1947）から始まり、70 周年を迎えた本年 2017 年に新図書館へ移転しました。

2. 新図書館建設の背景

東北大学では平成 6 年に総合キャンパス構想が立案されました。これは仙台市内の各キャンパスに存在する施設の分散化を解消し、大学内での有機的な連携が容易に行えるように、諸施設を統合した新キャンパス作りへ向けての検討です。この構想のなかで、農学分館・農学部のある雨宮キャンパスが移転対象となり、移転先は仙台市内青葉山地区の宮城県有地にある民営ゴルフ場が候補と



写真 1 青葉山コモンズ外観

なります。その後十数年かけて移転先の土地利用や移転元の土地売却などの問題が無事整理される運びとなり、平成 26 年には農学分館新建物の建築設計に本格着手します。そして建物は平成 27 年初めに着工して平成 28 年 6 月に竣工し、農学分館は移転期間を経て、平成 29 年 4 月に新図書館にて開館することとなりました。

3. 新図書館の概要

本学では建築設計に先駆けて、平成 18 年頃から新図書館の基本計画の検討を開始していました。基本コンセプトとしては従来の学習図書館的機能や研究図書館的機能に加えて、保存図書館的機能やコモンズの機能が盛り込まれたことが特色です。また新キャンパスのシンボリック機能も備えることとなりました。なお学内調整により農学分館単独の建物ではなく複合施設としての建設となったため、図書館の他に講義室、食堂、売店、保健室を備えることとなります。このことは学生が講義の合間や食事の前後に図書館へ足を運んでくれることが期待されるとともに、学生にとっても過ごしやすいキャンパス環境が提供できているのではないかと思います。

建物名称は平成 29 年初めに青葉山コモンズと命名されました。これは、学び、憩い、交流する、青葉山新キャンパスの共有地（コモンズ）が由来です。建物は 2 階建てで全体の総面積は約 1 万 m² となり、そのうち図書館部分は約 5700 m² となります。

4. 施設・設備

ここからは新図書館内の各フロアやコーナーを紹介していきます。なお基本コンセプトは「環境

共生を先導するキャンパスを創造していく」という大枠に沿って計画されていきました。

1) 全体建築プラン

ゴルフ場跡地の自然豊かな敷地を生かして、外観は傾斜地に沿った外形ラインとし、壁面等は彩度を抑えた色彩計画となっています。内部空間は木製の格子天井や、傾斜した敷地に合わせたフロア内の段差、光庭を複数個所設けた外光取り込みなどで、周辺の自然環境と調和させた設計となっています。また鉄骨ブレースの効果的な配置により極力壁の量を減らし、大きなワンルームのような場所とすることで互いに刺激しあえる創発的な場が設けられています。照明設備は全て LED となっており、フロアごとの照明色温度計画により、周辺環境やフロアごとの利用目的に適合した、快適な照明効果を狙っています。空調は床輻射空調という方式で、床全体を温めたり冷やしたりすることにより冷暖効果を得る方法です。また書庫は通常エアコンと合わせて、湿度コントロールのためにデシカント空調も配備しました。

2) 全体フロアプラン

新図書館のフロアコンセプトとしては、エントランス付近を動きのある賑わいのフロアとし、閲覧室の奥に行くにしたがって静かな落ち着いたのあるフロアとなるよう計画しました。具体的には、エントランス側にあるラーニングコモンズ・エリアを、オープンスペースとしてグループワークを中心に活動できるように計画し、そして閲覧室は、できるだけパーソナルワークが中心の利用環境となるような空間設計と什器配置をしました。また什器等の色調も、グループワーク側は活動的な暖

色系に統一し、パーソナルワーク側は思索的な暗色系に統一するよう配慮しています。そして図書館全体として計画されたサインを設けることにより、統一された雰囲気醸し出されるよう心掛けて計画しました。

3) ラーニングコモンズ

グループ作業やアクティブラーニングのためのフロアで、特色は飲食可能エリアがあるところです。図書館の入館システムの外側に配置され、食堂とはガラス壁を一枚挟んで隣接したフロアのため、食事をとりながら気軽に学習できる場所となっています。なお理系の大学院生等は研究室に活動拠点があると思われそうですが、そのような利用者にとってもランチミーティングやゼミ演習、他分野交流の場所等として利用されているようです。

またフロア内にはミーティングスペースを2か所設けてあります。ここは木枠とガラスとロールスクリーンで、ゆるく、心地よく囲われた空間となっており、備付けの天吊りプロジェクターやタッチパネルディスプレイ、壁面ホワイトボードなどにより少人数グループワークが催されています。

またプレゼン用器具類等の貸出も行っています。開館して間もないですが各種学会やシンポジウムなどでの利用も多数予約されており、知の交流施設としての役割も担ってきています。

4) パソコンコーナー

据置デスクトップパソコンが20台と、自動貸出返却ロッカー内にノートパソコンが10台の、計30台を利用者用として提供しています。図書館内はほぼすべてOAフロアとなっていて座席各所に電源コンセントを備え、また館内全域で無線LANが利用できる環境です。パソコンからの印刷はコイン式コピー機により可能となっていて、学生はレポート作成などで利用しています。また大画面モニタのパソコンスペースではメッシュ状の低間仕切りで囲われており、教員と学生による電子ジャーナルの読解指導などが行われるなど、新たな環境で新たな使われ方もなされてきています。

5) ラウンジ

前述のパソコンコーナーとともにナチュラル系とグリーン系で色調統一された什器により、落ち



写真2 ラーニングコモンズ

着いた雰囲気のエリアです。ここでは気分転換や思索のためにソファや新聞閲覧席を設け、ラウンジ資料を備えています。ラウンジ資料とは図書館新営に伴って購入した資料群で、農学系の枠を超えて、異分野からの発想を喚起する図鑑類や、異なる分野への関心を高める英語入門書などを備えています。ラウンジのコンセプトは「ユニバーシティパークからの景観から自然を感じ、思索できる場」であり、「様々な知と出会い、異分野からの発想を促される場」です。



写真3 農学分館閲覧室

6) 閲覧室

特色は一人当たりの机上面積を広くしたパーソナルワークデスクです。主に学部上級生や大学院生といった研究者向けのスペースとなるよう計画しており、初年次学生が主である図書館本館との差別化を図っています。農学分館全体の座席数は約370席です。

閲覧室内はエリアごとに机、椅子、間仕切りなどのバリエーションを持たせています。例えば、入口騒音からの距離、机の広さ、パーテーションによる視線の有無、電気スタンドの種類、などでエリアの個性を持たせることにより、利用者の各個性によって居心地の良い場所が選択できるように工夫しています。なお閲覧室内では完全に区切られた個室はないのですが、一番奥側をサイレントエリアとし、サインを掲示しています。

閲覧室の書架は、約20万冊収容可能な固定書架を備えています。東日本大震災を踏まえてブレースや書籍落下防止装置等による耐震対策を施しました。また閲覧室周囲の開放的な窓は、外には扉が、ガラスにはUVカットが施されて人と資料

を守りつつ、日中は明るい自然光で閲覧室が包まれています。また天井灯は必要最小限に配置され、印象的なLED書架照明によって閲覧室全体の照度を保つことにより、落ち着いた空間となっています。

7) 自習席

2階と天井の間の2.5階に配置されているロフトエリアは約60席のカウンター式自習席となっています。目の前にゴルフ場跡地であるユニバーシティパークの豊かな自然が見え、気持ちよく学習できるフロアです。ここでは多様な座席スタイルを提供すべく、7種類のデザインが異なる椅子を配置しています。基本は木製で、肘掛けの有無、背もたれの高低、座面の広さ、座面素材の多様化などに留意しつつ、全体として調和のとれた空間となっていて、利用者に人気のエリアです。



写真4 農学分館自習席

8) 共用書庫

電動式集密書架を備えた共用書庫の収容能力は約50万冊です。各キャンパス図書館の書架・閲覧スペースを増やす役割を持っており、書庫内資料はリクエストにより各キャンパスにデリバリーすることも可能です。書庫内は学内各館の所蔵比に準じたエリア分けをしており、デポジットライブラリーとして運用しています。

9) バックヤード

特色としては、共用書庫を運用していくにあたっての十分な広さの荷解室、及びトラックからの積み下ろし等が容易となるようなサービスヤード（駐車場）を備えていることです。またスタッフ休息用のスタッフラウンジも十分な広さを備え、

快適な職務空間となっています。

5. 資料の状況

キャンパス移転にあたって資料の配列や所在グループも、利用者にとってよりアクセスしやすいような工夫を行いました。移転前は独自分類・独自配列で約8つの所在に分かれていた資料群を、移転を機に図書はNDC分類へ、雑誌は和洋ごとのタイトル配列へ約2年かけて統合し変更しました。このことによって新図書館では資料へのアクセス性が高まり、余裕を持った書架空間と相まって魅力的な書棚になっているのではないかと思います。

6. サービスの状況

開館時間は、通常平日 9:00～20:00、休業期間は平日 9:00～17:00 です。なお本学農学研究科・農学部にも所属の利用者は年中無休で 7:00～24:00 の間、入館できます。入館に際して学生は学生証、教職員は職員証、その他の方は図書館発行の利用証で入館可能です。

7. 職員の状況

2017 年 7 月現在の農学分館職員数は、分館長 1 名（教員兼務）、常勤職員 3 名、再雇用職員 1 名、非常勤職員 2 名です。その他に、夜間カウンター業務担当の学生アルバイトが、一日に 2 名ずつ勤務しています。

8. 今後の課題

新図書館ということもあって、エアコンや照明などの電気代をはじめ、各種維持費が不透明な状況です。今後、適切な空調稼働や、清掃契約など、運用しながら適切な運営費へ調整していくことがひとつの課題です。

もうひとつの課題は、利用者範囲の拡大です。平成 30 年秋には直近の丘の上に約 750 戸のユニバーシティハウス（学生寄宿舍）が建設され、入居を開始する予定となっています。これに伴い現在の農学研究科・農学部に限定している無人開館についても、セキュリティとの兼ね合いで利用者範囲の見直しを検討していくことになるかと思われます。

最後は蔵書構築の課題です。移転前は農学研究

科・農学部の資料を中心に収集・構築してきましたが、移転後の新キャンパスでは様々な分野の部局・研究所等にも隣接しているため、利用者ニーズと購入予算とを調整していくが必要になると考えています。

9. 最後に

2017 年 4 月 4 日に開館してから 1 か月間、館内にメッセージボードを設けて利用者の声を収集しましたので、その一部を以下にご紹介します。利用者からはたくさんのメッセージを寄せてもらうことができ、新図書館立ち上げに携わった職員としては感涙ものでした。今後も、利用者に愛される図書館であり続けられるよう努力していきたいと考えています。

・とても快適で過ごしやすい！ 絶対リピします！ 星5つです！

・毎日通いたくなりました。スタイリッシュ…

・お洒落で綺麗。ここで勉強して単位とりたい。

・居心地が良すぎて、家に帰れなくなります…

・広くてキレイで感動しました！！ 自習スペースが広い…。たくさん利用させていただきます♪

・すごく素敵です！！ 窓も広くて入ってくる光もきれい！ 図書館 LOVE

・居心地よすぎて、なんだけへらへらしてしまいます。3F のカウンター席の椅子、いくつも種類があって、どれもおしゃれで、ホントに素敵なインテリアですね

・雰囲気もとてもよく、通いたい図書館だなと思いました。

・空間が広くて嬉しいです。色調もとても落ち着きます。本がギュウギュウでないととても読みやすい（手に取りやすい）たくさん学びたくなっちゃう！

・住みたい。

<図書館所在地>

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1 青葉山コモンズ内

<http://www.library.tohoku.ac.jp/agr/>

（東北大学附属図書館農学分館図書係）

平成 29 年 4 月から 6 月に発表された図書館員に役立ちそうな情報を掲載します。業務の一助にお使いください。記事の情報源はそれぞれの項目ごとに明示してあります。

【縞萎縮病に強い小麦新品種「タマイズミR」】

農研機構次世代作物開発研究センターは、多収で中華麺適性の優れた小麦品種「タマイズミ」を改良し、コムギ縞萎縮病に強くした新品種「タマイズミR」を育成。関東・東海などの温暖地での栽培に適しています。「タマイズミR」のコムギ縞萎縮病への抵抗性は「強」で、タマイズミの「やや弱」に比べて明らかに強く、コムギ縞萎縮病の発生している畑で「タマイズミ」より多収となります。その他の栽培特性、および中華麺への適性は「タマイズミ」とほぼ同じです。

平成31年から三重県にて一般栽培が開始される予定で、1,000ha程度の普及が見込まれています。

情報源：農研機構次世代作物開発研究センター（プレスリリース）

平成29年5月18日

【抹茶や粉末茶に適した緑茶用品種「せいめい」】

高品質な抹茶や粉末茶の原料には、収穫前に2週間以上茶樹を覆う「被覆栽培」を行った新芽が用いられます。農研機構は、被覆栽培における収量と製茶品質に優れた緑茶用品種「せいめい」を育成。緑茶用の主要品種である「やぶきた」や「さえみどり」よりも被覆栽培における収量が高く、色合いと旨味に優れた抹茶や粉末茶、かぶせ茶を製造できます。「さえみどり」よりも耐寒性に優れるため栽培適地が広く、関東以南で栽培できます。需要が急増している抹茶や粉末茶用の高品質な原料を提供することで、日本産緑茶のブランド力強化と需要拡大に貢献します。

情報源：農研機構果樹茶業研究部門（プレスリリース）

平成29年5月23日

【味を感知する受容体のセンサー領域の立体構造を初めて解明】

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科らの共同研究グループは、口の中で味物質の感知を担う味覚受容体タンパク質について、受容体の主要部分である細胞外のセンサー領域が、味物質を結合している状態の構造を解明することに成功。五感を担うセンサータンパク質のうち、味覚の受容体の立体構造が明らかになったのは、これが初めて。味覚受容では、食物に含まれるさまざまな化学物質を、限られた種類の受容体で認識することから、味覚受容体は、特定の化学物質を厳密に見分けるセンサーではなく、比較的幅広い化学物質を認識できるセンサーであるという特徴があります。研究グループは、大型放射光施設 SPring-8 を用いて解析を行い、味覚受容体を持つ味物質結合ポケットの特徴ある構造が、多様な味物質の認識を可能にしていることを解明。本研究成果は、味覚受容の最初の反応である、受容体と味物質との相互作用を原子レベルで初めて捉えたものであり、味覚の仕組みを理解する重要な一歩になるとともに、新しい味物質の開発などにもつながると期待されます。

情報源：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（薬）プレスリリース）

平成29年5月22日

【放射性セシウムを吸収しにくい水稻の開発に成功】

農地土壌から作物への放射性セシウムの移行を低減するために、水稻では、カリ肥料の増肥（カリ増肥4）が効果的な対策として実施されています。一方、長期にわたって、省力的かつ低コストで行える新たな低減対策も生産現場から求められています。そこで農研機構は、イオンビーム照射による突然変異法により、放射性セ

シウムを吸収しにくいコシヒカリ(Cs低吸収コシヒカリ)を開発。Cs低吸収コシヒカリを、放射性セシウムを含む水田で栽培した場合、コメの放射性セシウム濃度はコシヒカリの半分に減少。Cs低吸収コシヒカリにおいて、コメの放射性セシウム濃度が低下したキー(鍵)となる遺伝子を岩手生物工学研究センターとの共同研究で特定しました。この遺伝子は、イネ根のナトリウム排出に関与するタンパク質リン酸化酵素遺伝子(0sSOS2;オーエスエスオーエスツー)が変異したものである。この変異が原因で、Cs低吸収コシヒカリは根のセシウム吸収がコシヒカリに比べて、抑制されていました。Cs低吸収コシヒカリの生育特性や収量はコシヒカリとほぼ同等で、コシヒカリと同じ方法で栽培できます。また食味もコシヒカリとほぼ同等です。セシウム吸収を抑制する遺伝子(0sSOS2の変異)を簡易に検出できるDNAマーカー5)を開発。このDNAマーカーの活用により、コシヒカリ以外の品種にも放射性セシウムを吸収しにくい性質を効率良く付与することができます。

情報源：農研機構農業環境変動研究センター
(プレスリリース)

平成29年5月31日

【アスパラガス茎枯病の抵抗性に関与する遺伝子群を特定-日本固有種ハマタマボウキを用いた世界初の茎枯病抵抗性品種育成が期待される-】

アスパラガス茎枯病は、西南暖地の露地産地を壊滅状態に追い込んだ難防除病害であり、食用アスパラガスには茎枯病抵抗性の品種がなく、現在は薬剤防除に頼っているが完全に発病を防ぐのは非常に困難。茎枯病感受性の食用アスパラガスと茎枯病抵抗性のハマタマボウキを用い、茎枯病菌感染によって発現誘導される遺伝子群を網羅的に比較解析した結果、茎枯病抵抗性に関与する遺伝子群を特定した。本研究成果は世界初の茎枯病抵抗性アスパラガス品種の育成に貢献することが期待され、茎枯病抵抗性アスパラガス品種が育成されると、現在行われている殺菌剤の散布回数を減らすことができ、国産アスパラガスの生産コストと生産労力を劇的に削

減できる可能性がある。

情報源：東北大学大学院生命科学研究科(プレスリリース)

平成29年6月2日

【化粧品材料などを作る新たな遺伝子組換えカイコの作出】

カイコは繭を作る際に、後部絹糸腺でフィブロインというタンパク質を、中部絹糸腺でセリシンと呼ばれるタンパク質を作ります。後部絹糸腺で作られたフィブロインは中部絹糸腺に送られ、フィブロインの周りがセリシンによってコートされ、前部絹糸腺に送られ、さらに吐糸口と呼ばれる所から糸が吐き出されます。繭から糸を引く際、アルカリ性のお湯で繭を煮ることでセリシンを溶かします。これにより、フィブロインからできたシルクを引くことができます。これが製糸です。セリシンは、非常に保水力が高く、化粧品の材料として使われています。しかし、繭をお湯で煮る際に、このセリシンが分解されてしまうために製糸の時に取り出されたセリシンは本来の保水力を失ってしまいます。

本学応用生物学系小谷英治准教授らは、モンシロチョウが持つピエリシンのホモログをカイコの後部絹糸腺で作らせることで、フィブロインを作らず、セリシンのみの糸を吐く遺伝子組換えカイコの作出に成功。これにより、温和な条件で、保水力に優れたセリシンを取り出すことができるようになりました。このセリシンは、ゲルやスポンジなどに加工しやすく、ES細胞やiPS細胞の培養やそれらの幹細胞から様々な細胞へ分化させるのにも優れた特性を持つことがわかりました。

情報源：国立大学法人京都工芸繊維大学(プレスリリース)

平成29年6月13日

【製パン適性に優れた寒冷地向け小麦新品種「夏黄金」】

東北・北陸地域における現在のパン用主力品種「ゆきちから」は、食パン等に使われる強力小麦と比べるとパン生地力がやや弱い準強力小麦のため、食パンの製造が難しいなど製造で

きるパンの種類が限定される欠点がありました。そこで農研機構は、たんぱく質の組成を改良してパン生地を強くした新品種「夏黄金」を作出。食パンを始め、様々な種類のパン製造に適しています。さらに「夏黄金」は、「ゆきちから」よりも穂発芽しにくく、赤かび病にやや強い品種です。積雪の多い東北・北陸地域の平坦地での栽培に適しています。「夏黄金」の小麦粉や加工品は、平成31年から本格的に販売される予定。

情報源：農研機構東北農業研究センター（プレスリリース）

平成29年6月13日

【西南暖地に向く早生モモ新品種「さくひめ」】

日本の主要なモモ品種が春に正常に開花するためには、冬に一定時間以上、低温にさらされる必要がありますが、今後温暖化が進行すると、冬の低温が不十分となり、モモの生産が不安定になる産地があると見込まれています。このような地域でモモ生産を継続するために、低温にさらされる時間が短くても正常に開花する品種が求められています。農研機構は、開花に必要な低温にさらされる時間(低温要求時間2))が日本の主要品種の約半分に短縮されたモモ新品種「さくひめ」を育成。温暖化により冬の気温が高くても、安定した開花と結実が見込めることから、モモの安定生産に貢献します。果実の大きさや糖度は、早生の主要品種である「日川白鳳」と同等で、「日川白鳳」よりも5日ほど早く成熟します。全国で栽培可能で、早生品種の栽培割合の高い西日本の産地を中心に普及が期待されます。苗木は平成29年秋より販売される見込みです。

情報源：農研機構果樹茶業研究部門（プレスリリース）

平成29年6月28日

【超高齢社会と図書館について調査】

平成28年度に国立国会図書館が実施した、超高齢社会と図書館に関する調査研究の報告書を公開。

URL: <http://current.ndl.go.jp/report/no16>

調査の概要

3機関の高齢者サービスについて文献調査や現地調査などによるケーススタディと、図書館をあまり利用しない人も含めた高齢者20名にインタビュー調査を実施。

調査結果

＜ケーススタディ＞

図書館における高齢者サービスの先進的事例について、その概要や、実施するに至った経緯などを紹介。

- ・高齢者が活躍する場としての図書館（横浜市立都筑図書館のボランティア団体「つづき図書館ファン倶楽部」）

- ・図書館からアプローチする認知症支援（川崎市立宮前図書館）

- ・福祉行政からアプローチする認知症支援（日向市大王谷コミュニティセンター図書室（宮崎県））

＜高齢者へのインタビュー調査＞

高齢者の図書館利用の現状について、次の点が明らかになりました。

- ・高齢者の日常行動や図書館利用の目的・形態などが非常に多様である
- ・図書館への物理的なアクセス手段が変化しており、配慮が必要である
- ・図書館の資料・情報へのアクセスに対するニーズがある
- ・場としての図書館に対するニーズがある
- ・認知症に対して高い関心をもっている
- ・主体的に社会参加することを望んでいる

情報源：国立国会図書館（プレスリリース）

平成29年6月7日

【CiNiiに収録されていた論文データを、国立国会図書館が収集・保存・公開】

国立国会図書館（NDL）と大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所（NII）は、NII による学協会を対象とした論文の電子化・公開サービス「電子図書館事業」（NII-ELS）の終了にともない、NII の「CiNii Articles」で提供されていたそれらの論文データの長期保存と公開のために連携して取り組むことになりました。NDLは、これら論文データの

うち、以下のものを収集・保存・公開します（約 380 誌・100 万件）。

□学協会が NDL による収集・保存・公開を希望する論文

□発行終了あるいは編集元の解散等の理由により、学協会等から公開が行われない論文

このうち、第一弾となる 29 誌・5149 件の論文データを「国立国会図書館デジタルコレクション」に移行し、6月22日に公開を開始。CiNii Articles の検索結果からも、リンクをたどってこれらの論文データを見られるようになっていきます。そのほかの論文についても、必要な準備が整ったものから、NDLが収集・保存し、「国立国会図書館デジタルコレクション」で順次公開。

情報源：国立国会図書館（プレスリリース）

平成29年6月22日

平成 29 年度第 2 回理事会議事録

日 時：平成 29 年 6 月 3 日（土） 通常総会
終了後

場 所：明治大学中央図書館資料室

出席者：長塚理事、惟村理事、田沼理事、木村理事、尾崎理事、野口理事、安井理事、東盛理事 上田事務局員

欠席者：三井理事

（議 題）

1. 次期運営体制について

事務局より、29 年度運営体制（案）が示され、審議した結果、出席理事全員が、これを承認した。

2. 創立 50 周年記念事業の取り組み

第 1 回理事会での検討を踏まえ、参加者の規模を精査し実施を検討することとした。

利活動法人日本農学図書館協議会

平成 29 年度通常総会議事録

1 日 時 平成 29 年 6 月 3 日（土）

午前 11 時から午後 12 時まで

2 場 所 明治大学中央図書館資料室

東京都千代田区神田駿河台 1-1

3 正会員総数 86 名

4 出席者数 54 名（うち書面表決 45 名）

5 審議事項

（1）第 1 号議案 議長の選任

（2）第 2 号議案 平成 28 年度事業報告

（3）第 3 号議案 平成 28 年度決算報告及び監査報告

（4）第 4 号議案 平成 29 年度事業計画（案）

（5）第 5 号議案 平成 29 年度収支予算（案）

（6）第 6 号議案 理事選任報告

6 議事の経過の概要及び議決の結果

正会員総数 86 名のうち、54 名出席（うち書面表決者 45 名）と定款 28 条に規定する総会の定足数を満たしており、総会は成立したことを表明した。

（1）第 1 号議案 議長の選任

司会より、木村博氏を指名し、全員異議なくこれを承認した。

（2）第 2 号議案 平成 28 年度事業報告

議長より、平成 28 年度事業報告案を配布し、詳細に審議したところ、全員異議なくこれを承認した。

（3）第 3 号議案 平成 28 年度決算報告及び監査報告

議長より、平成 28 年度決算報告案及び監査報告を配布し、詳細に審議したところ、全員異議なくこれを承認した。

（4）第 4 号議案 平成 29 年度事業計画（案）

議長より、平成 29 年度事業計画（案）を配布し、詳細に審議したところ、全員異議なくこれを承認した。

（5）第 5 号議案 平成 29 年度収支予算（案）

議長より、平成 29 年度予算（案）を配布し、詳細に審議したところ、学生会員拡大方策を検討する必要がある等の補強意見があり、補強意見を含め全員異議なくこれを承認した。

（6）第 6 号議案 次期理事選任の報告

議長より、次期理事選任の報告書を配布し、全員異議なくこれを承認した。

7 議事録署名人の選任に関する事項

議長より本日の議事をまとめるに当たり、議事録署名人 2 名を選任することを諮り、野口昌之氏及び尾崎聖太郎氏を選任することを全員異議なく承認した。

特定非営利活動法人日本農学図書館協議会 第 14 回通常総会

I 平成 28 年度事業報告

【概 要】

平成 28 年度の普及事業は、会誌の刊行及びセミナー・見学会の開催を年間計画に基づき実施した。委託事業は、前年に引き続き日科情報（株）からの受注及び、新たに麻布大学から「いのちの博物館データベース構築」事業を受注した。

1. 普及事業

1) 会誌刊行

本年度は、2 回の編集委員会を明治大学中央図書館（駿河台）で開催。第 2 回編集委員会において「2017 年度編集計画」を策定した。本年度の会誌は、182 号（6 月 1 日）から 185 号（3 月 1 日）の 4 号を発行した。

2) セミナー・見学会

7 月にセミナー委員会を東京農業大学図書館で開催した。委員会での検討結果に基づき、「謎多きウナギの生態：近年の取り組みと成果について」をテーマにセミナー・見学会を中央水産研究所で開催し、14 名が参加した。

3) ホームページの充実・強化

お知らせ情報の追加を行った。

2. 調査研究事業

特段の取り組みはなかった。

3. 国際交流事業

特段の取り組みはなかった。

4. 受託事業

本年度の「抄録・索引作成および日科辞データ整備事業」は、前年に引き続き日科情報より受託し、受託件数も順調に推移した。前年度と同様、抄録・索引作成者の高齢化問題が顕在化している。

麻布大学より、「いのちの博物館データベース構築」事業を受託した。データベース構築には、FileMaker を使用した。データベースは、トップ画面、標本資料一覧、基本データ、詳細データのテーブルを設定し、リレーションした。総フィールド数は 67 項目。2 月末に納品した。

5. 会員について

2016 年 4 月の農研機構組織改革により、傘下の研究所の脱会が見られた。団体会員（B 会員）の申し込みが 1 件あった。

	平成 28 年度 会員数	入会	退会	平成 29 年度 当初会員数
A 会員	52	0	2	50
B 会員	4	1	0	5
個人会員	35	0	4	31
計	91	1	6	86

<主な活動>

4 月 11 日 （株）日科情報挨拶
 4 月 14 日 会計監査
 4 月 19 日 麻布大学挨拶
 5 月 28 日 通常総会・第 1 回理事会
 6 月 13 日 麻布大学と協議
 6 月 21 日 麻布大学と協議
 6 月 27 日 （株）日科情報打ち合わせ
 7 月 9 日 セミナー委員会
 7 月 21 日 三役会議
 7 月 29 日 麻布大学と協議
 8 月 25 日 第 1 回編集委員会
 9 月 8 日 麻布大学と協議
 11 月 8 日 第 18 回図書館総合展見学
 12 月 13 日 セミナー&見学会開の開催
 12 月 26 日 麻布大学委託事業打ち合わせ
 1 月 17 日 麻布大学委託事業打ち合わせ
 1 月 30 日 麻布大学業務打ち合わせ
 2 月 6 日 麻布大学業務打ち合わせ
 2 月 13 日 麻布大学業務打ち合わせ
 2 月 21 日 麻布大学業務打ち合わせ
 2 月 27 日 第 2 回編集委員会
 3 月 18 日 第 2 回理事会

Ⅱ 平成 28 年度会計報告

1. 収 支 計 算 書

平成 28 年 4 月 1 日から平成 29 年 3 月 31 日まで

科目	予算額	決算額	差異
【経常収入の部】			
会 費 収 入	815,000	795,000	20,000
個 人 会 員	175,000	165,000	10,000
団 体 会 員 A	520,000	510,000	10,000
団 体 会 員 B	120,000	120,000	0
事 業 収 入	2,050,000	1,740,232	309,768
抄 録 索 引 作 成 受 託 費	950,000	1,034,560	-84,560
調 査 委 託 事 業	1,100,000	705,672	394,328
DB 構築受託費	1,100,000	705,672	394,328
広 告 料 収 入	160,000	160,000	0
雑 収 入	100	12	88
受 取 利 息	100	12	88
経常収入合計	3,025,100	2,695,244	329,856
【経常支出の部】			
事 業 費	2,040,000	1,451,344	588,656
会 誌 刊 行 費	550,000	542,155	7,845
セミナー等活動費	70,000	26,648	43,352
抄 録 索 引 作 成 費	570,000	705,976	-135,976
DB 構築受託費	850,000	176,565	673,435
管 理 費	980,000	993,330	-13,330
理 事 会 等 運 営 費	80,000	45,798	34,202
事 務 局 運 営 費	900,000	947,532	-47,532
経常支出合計	3,020,000	2,444,674	575,326
経常収支差額	5,100	250,570	-245,470
【その他資金収入の部】			
その他資金収入合計	0	0	0
【その他資金支出の部】			
その他資金支出合計	0	0	0
当期収支差額	5,100	250,570	-245,470
前期繰越収支差額	626,188	626,188	0
次期繰越収支差額	631,288	876,758	-245,470

貸借対照表

平成 29 年 3 月 31 日現在

科 目	金 額		
【資産の部】			
流動資産			
現金預金	635,963		
未収金	360,870		
流動資産合計		996,833	
資産合計			996,833
【負債の部】			
流動負債			
未払金	100,000		
預り金	20,075		
流動負債合計		120,075	
負債合計			120,075
【正味財産の部】			
正味財産			876,758
(うち当期正味財産増加額)			250,570
負債及び正味財産合計			996,833

監査承認証

特定非営利活動法人 日本農学図書館協議会の
平成 28 年度の会計に関する証拠書類を監査の結果、
適正かつ正確であったと認めます。

平成 29 年 4 月 12 日

石田 一明



三浦 圭子



3. 財 産 目 録

平成 29 年 3 月 31 日現在

科 目	金	額
【資産の部】		
流動資産		
現金 預金	635,963	
現金 現金手許有高	7,620	
普通預金	658,343	
三井住友銀行 経堂支店 普 5217583	557,471	
ゆうちょ銀行 10100-63738461	100,872	
前受金	-30,000	
未収金	360,870	
流動資産合計		996,833
資産合計		996,833
【負債の部】		
流動負債		
未払金	100,000	
預り金	20,075	
流動負債合計		120,075
負債合計		120,075
正味財産		876,758

Ⅲ 平成 29 年度事業計画

平成 28 年度の事業結果を踏まえ、平成 29 年度はつぎの事業を実施します。

1. 普及事業

1) 会誌の刊行

年間編集計画に基づき年 4 回刊行し、掲載内容の充実化を図ります。

2) セミナー・見学会の開催

年間計画に基づき、情報技術等に関する農学図書館情報セミナー、大学図書館、民間企業の見学会を開催します。

3) ホームページの充実・強化

ホームページ・コンテンツ等の充実に努めます。また、役員・会員の協力を得て運営します。

2. 調査研究事業

農学情報ツールの開発課題について検討を行います。

3. 国際交流事業

海外の農学系関連団体との交流を検討します。

4. 受託事業

1) 抄録・索引作成および日科辞データ整備事業（継続）

日科情報（株）から受託し、抄録・索引作成等の事業に取り組みます。

2) その他

新規委託事業の獲得に努めます。

5. 創設 50 周年記念事業の推進

本年度は農図協創設 50 周年に当たるため、実施する事業にその旨を記すとともに、50 周年記念に相応しい事業を企画します。

6. 会員拡大

役員を中心に会員の拡大に努めます。

Ⅳ 平成 29 年度収支予算

(平成 29 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日まで)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
【経常収入の部】				
会費収入	805,000	815,000	-10,000	
個人会員	155,000	175,000	-20,000	5,000×31=155,000
団体会員 A	500,000	520,000	-20,000	10,000×50=500,000
団体会員 B	150,000	120,000	30,000	30,000× 5=150,000
事業収入	950,000	2,050,000	-1,100,000	
抄録原稿作成受託費	950,000	950,000	0	
調査委託事業	0	1,100,000	-1,100,000	
広告料収入	160,000	160,000	0	
雑収入	100	100	0	
経常収支合計	1,915,100	3,025,100	-1,110,000	
【経常支出の部】				
事業費	1,270,000	2,040,000	-770,000	
会誌刊行費	550,000	550,000	0	
セミナー等活動費	50,000	70,000	-20,000	
抄録原稿作成費	570,000	570,000	0	
その他受託事業	0	850,000	-850,000	
50周年記念事業費	100,000	0	100,000	
管理費	980,000	980,000	0	
理事会等運営費	80,000	80,000	0	
事務局運営費	900,000	900,000	0	
経常支出合計	2,250,000	3,020,000	-770,000	
経常収支差額	-334,900	5,100	-340,000	
【その他資金収入の部】				
繰入金収入				
その他資金収入合計				
【その他資金支出の部】				
予備費				
その他資金支出合計				
当期収支差額	-334,900	5,100	-340,000	
前期繰越収支差額	876,758	626,188	250,570	
次期繰越収支差額	541,858	631,288	-89,430	

(主な取組み)

平成 29 年度第 1 回編集委員会

日 時：平成 29 年 6 月 20 日（火）

18：00～19：00

会 場：明治大学駿河台キャンパス中央図
書館資料室

(議 題)

1. 29 年度会誌編集計画の追加検討
2. 50 周年記念号の検討
3. その他

平成 29 年度第 1 回セミナー委員会

日 時：2017 年 7 月 29 日（土）

10:00～11：30

場所：東京農業大学図書館

(議 題)

1. 2017 年度セミナー・見学会の課題検討
2. その他

NPO 法人日本農学図書館協議会では、投稿要領及び執筆要領を新たに規定し、読者の皆様に積極的に投稿していただくための環境を整えました。当面する図書館の課題や日常の図書館員の声など、自由にご投稿していただくことを願っています。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

【問い合わせ先】TEL：03-3408-5077 E-mail:jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 投稿要領

1 趣 旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の投稿に関する取り扱いについて定めるものとする。

2 投稿者の資格

本誌に投稿できる者は、農学系図書館の活動に賛同する者とする。

3 執筆及び投稿要領

原稿執筆に当たっては、本要領及び別に定める原稿執筆要領に従うものとする。

4 投稿原稿の取り扱い

(1) 投稿原稿は会誌編集委員会においてその採否を決定する。

(2) 投稿された原稿は、原則として返却しない。

5 謝礼

(1) 執筆者には、原稿が掲載された「日本農学図書館協議会誌」を3部贈呈する。

(2) 投稿及び依頼原稿の稿料は別に定める。

6 著作権

(1) 本誌に掲載する著作物の著作権は、日本農学図書館協議会に帰属する。

(2) 執筆者自身が当該著作物の再利用を希望する場合、日本農学図書館協議会は、再利用が学術研究及び農学図書館業務改善の進展に資するものである場合は、これを認めることがある。

(3) 第三者から、論文の複製及び転載などに関する許諾の要請があり、日本農学図書館協議会が必要と認めた場合は、許諾することがある。

7 個人情報

編集の過程において入手した個人情報は、本誌の編集刊行に関する活動以外の目的には使用しない。

(附則) この投稿要領は、平成27年8月1日より施行する。

日本農学図書館協議会誌 原稿執筆要領

1 趣 旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の投稿執筆に関する事項を定めるものとする。

2 投稿原稿は、次の要領で作成し提出する。

(1) 原稿の受付は、随時とする。

(2) 原稿は、Word形式もしくはテキスト形式を使用し、横書きで10,000字程度（図表・写真は1枚当たり250文字換算）とする。また、図表も原則として、電子化したデータで提出するものとする。刷り上りは4ページ程度を想定する。

(3) 文中の見出し番号の表記は、1. 1) ①とする。

(4) 図表の見出しは、図1及び表1とし、図の下および表の上に記したうえで、挿入箇所を本文欄外に指示する。

(5) 注記もしくは引用文献等は、本文の該当箇所右肩に1)と記し、原稿の末尾にまとめて記載する。なお、記載例は①及び②の通りとする。

① 編著者名『書名』（シリーズ名）出版社、出版年（西暦）、引用ページ

② 執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号、発行年月、引用ページ

(6) 原稿には、表題及び英文タイトル、執筆者氏名及びローマ字名、所属機関の英文名を添付する。

(7) 原稿の提出は下記宛てとし、日本農学図書館協議会事務局が受領した日をもって原稿受付日とする。

〒156-8502 東京都世田谷区桜ヶ丘1-1-1
東京農業大学 教職・学術情報課程内
NPO法人 日本農学図書館協議会事務局
TEL. FAX. 03-3408-5077 jaald@nifty.com

(8) 執筆者の校正は、1回を原則とする。

(9) 「別刷」を希望する者は、校正の際に必要な部数を日本農学図書館協議会事務局に連絡すること。なお、経費（実費）については、本人の負担とする。

(附則) この投稿要領は、平成27年8月1日より施行する

(編 集 委 員)

委員長	惟村 直公	東京農業大学
委 員	三井 文子	農研機構果樹茶業研究部門
	尾崎 聖太郎	麻布大学
	東盛 達也	明治大学
事務局	田沼 繁	特定非営利活動法人 日本農学図書館協議会

会 員 頒 布

日本農学図書館協議会誌 187号
2017年(平成29年) 9月 1日発行
発行人 長塚 隆
編集・発行 特定非営利活動法人日本農学図書館協議会
住 所 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学教職・学術情報課程
TEL&FAX 03 (3408) 5077 e-mail:jaald@nifty.com
URL:http://www.jaald.ac.affrc.co.jp
印 刷 所 東京大学構内 文陽堂文具店
住 所 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
法文2号館地階
TEL&FAX 03(3813)7386 e-mail:bunyodo@amethyst.broba.cc

I S S N 1342-1905